

## 国士館と松陰

熊 本 好 宏

### はじめに

国士館の世田谷キャンパス隣に位置する松陰神社は、単に「隣接している」という空間的な関係性ではありません。国士館は、大正6（1917）年の創立以来、松陰神社と様々な関係を持ちながら、現在に至っています。国士館の歴史を示す資料から、松陰神社、ひいては吉田松陰との関係を紹介することが、今回、私に与えられたテーマです。平成27（2015）年3月に、創立100周年記念事業の一環で『国士館百年史 史料編』（上・下）が刊行されましたので、主にこの史料編に掲載された史料を示しながら、国士館の歴史にみえる「松陰」を紹介していきます。

まずは、吉田松陰や松陰神社、国士館創立者の柴田徳次郎について、簡単に触れておきます。

吉田松陰は、文政13（1830）年生。長州藩士、山鹿流兵学師範、松下村塾を主宰し、門下生には、明治維新または明治政府で活躍する久坂玄瑞・高杉晋作・伊藤博文・山縣有朋などを輩出しています。安政の大獄で、安政6（1859）年10月27日、享年30で刑死しています。松陰の死後、文久3（1863）年、小塚原刑場回向院（現荒川区）にあった墓は、長州藩抱屋敷の世田谷村若林の地に改葬されます。次いで明治15（1882）年、同地に松陰神社が創建され、明治41年には旧長州藩出身者によって石灯籠が寄進・設置され、以後、徐々に整備されていくことになります。なお、山口県萩市の松陰神社は明治23年の創建です。

国士館の創立者である柴田徳次郎の略歴は次の通りです。明治23年12月福岡県の生まれ。14歳で上京し、苦学の末に早稲田大学専門部を卒業します。大正6年11月、26歳の時に国士館を創立し、以降、中学校・商業学校・専門学校等を創設しています。昭和21（1946）年に公職追放、昭和28年に国士館に復帰して、同年に短期大学を、昭和33年に国士館大学を創設し、現在の総合学園国士館の基盤を整えました。昭和48年1月26日に享年83で死去しました。正四位勲二等瑞宝章。経済学博士。

ひとつ留意しておきたいことは、吉田松陰と柴田徳次郎が生きた時代が全く異なっている点です。

今回は、国士館の歴史のなかで、創立と理念、世田谷への移転、模造松下村塾

の建設の3点の事象から「松陰」との関係性をひもといてみます。国士館の歴史に、時代を超えて「松陰」が与えた影響とその背景を、史料から読み取って頂ければと思います。

## 1. 国士館の創立

国士館の創立には、その母体となる「青年大民団」の発足に淵源があります。青年大民団は、当時の世相を憂いた青年層の団体で、大正2（1913）年4月3日、同世代への啓蒙を目的として牛込に結成されました。団には、早稲田大学をはじめとして都下の学生が集っていますが、国士館の創立者となる柴田徳次郎のほか、宮川一貫、白石好夫などの福岡出身者が多数参加していました。彼らは、自らを「大民同人」と称し、「興国救人」のスローガンを掲げて、自己の啓発・修養と青年層への啓蒙を行っていきます。団の発足とともに定められた「青年大民団規約」の7箇条には、後に創立する国士館の建学の理念につながるような文言が、いくつか謳われています<sup>1</sup>。

「一、本団員は士道の大本に基き常に心身修練を怠る可からず」

「一、学問は知徳の精進向上を旨とし爵禄の如きは一切念頭に挿む可らず」

「士道」や「心身修練」の文言は、後の国士館教育の柱となる武道を想起させます。また「学問は知徳の精進向上」の文言からは、特定の専門知識を高めることを越えた、人間形成に主眼を置いていることが読み取れます。ここには、後に国士館を創立する大民同人の学問に対する考え方が端的に示されています。

その後の青年大民団の動向を見ていきます。大正5年6月15日、青年大民団は月刊の雑誌『大民』を創刊します。雑誌の主幹には柴田徳次郎が就いています。『大民』には、大民同人の動向から、時事問題に関する評論、例えば普通選挙問題の特集号を発行するなど、多岐にわたる内容が掲載されています。『大民』の創刊後は、言論を中心として社会の改善・改革を目指した活動を行っています。また、茶話会や講演会をたびたび開催して、共感する青年を徐々に増やしていくことになります。

大正6年の夏から秋にかけて、いわゆる「早稲田騒動」が起こります。これは、早稲田大学の学長改選をめぐる学長天野為之と理事高田早苗との対立で、学内を二つに割っての大騒動となりました。後に、尾崎士郎が著した小説『人生劇場』の題材として有名となり、何度も映画化されています。先に触れたように大民同人には、早稲田出身者が多かったため、天野派を支持してこの騒動に関与しています。草創期の国士館運営の中心を担う花田大助（後に半助）は、天野一派の主導的な役割を担っており、また柴田徳次郎は学内の建物封鎖などの実力行使に加わるなどしています。結末は、天野派が敗れ、この騒動で早稲田大学教授の座を追われた永井柳太郎や原口竹次郎、長島隆二などは、後に国士館で教鞭を執るこ

とになります。

この早稲田騒動は、大民同人に大きな影響を与えました。彼らにとって母校の早稲田において、新体制を目論んだところへの撤退という結果となり、「教育」に対して目を向ける転機となっています。この騒動が、新たな高等教育機関の創造、すなわち国士館が誕生する一因となっています。

大正6年11月4日、青年大民団は麻布区筈町（現港区南青山）の事務所内に、私塾「国士館」を創立します。大正6年11月号『大民』の巻頭には「宣言 活学を講ず」のタイトルで、新たな教育機関の創設とその理念を掲載します<sup>2</sup>。同時期に、この「宣言」を元にして「国士館設立趣意書」が作成されました。運営の母体は青年大民団であり、大正7年の「青年大民団清規」には「育英養材」の文言で、大民団の一事業として国士館が位置づけられています<sup>3</sup>。

青年大民団の事務所は2階建ての小さな民家で、その1階部分の8畳と6畳の2部屋を利用して、国士館の講義は行われました<sup>4</sup>。講義は、日曜日を除く夜の7時から9時に行われ、都下の学生が集って受講しました。また、一応の学科課程が設けられていましたが、日替わりで1名の講師が2時間の講話を行うかたちでした。

さて、国士館創立の理念、また大民同人のねらいを「国士館設立趣旨」に見ておきましょう<sup>5</sup>。

物質文明の弊、日に甚だしく、人は唯だ科学智を重んじて、徳性涵養を忘る、今日に於て教育とは唯だ科学智の売買たるのみ、科学智の必要なるは本より言ふを待たざれど、此の如きは唯だ物質文明に終る、精神文明なくして国家豈に一日の安きを得んや、蓋し精神文明は物質文明を統一指導するものなり、精巧の武器、万種羅列するとも、兵士起つて之を運用するに非るよりは、戦場に何等の効果なからん、吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して国家の柱石たる真智識を養成せん事を期す。(略)

而して此の道場は、大自在力を孕むの契機たるを期す、陋隘僅かに膝を容るの一小寺小屋<sup>(f)</sup>たりと雖も、大正維新の松陰塾たるの効果あらん、一心足つて万能始めて用ゆべし、我が道場の期する処は、心学なり、活学なり、信念の交感なり、理を説いて理に堕せず、術を語つて術に溺れず、舌頭万有を吐吞して、方丈裏に風雲を捲かんとするに在り。(後略)

「物質文明」は明治維新後に西欧から取り入れた文化・科学を指し、維新以前に日本人が有していたものを「精神文明」と表現して、西欧科学偏重の近代教育と講義形式の教育方法を批判しています。略した部分には「ノート式の講義は死学」という表現も用いられており、近代教育への批判は痛烈です。この一方で国

士館は、明治以降に失った「徳性涵養」を重視した新たな教育で、社会の基礎となる真の人間を育成すると主張しています。これが国士館創立の理念です。この国士館の教育の目指すところが「大正維新の松陰塾たるの効果あらん」の表現に示されています。

明治後期から大正初期にかけて日本国内は、農村の疲弊、都市部のスラム化、民衆運動の多発など、多くの社会問題を抱えていました。先に触れたとおり、そもそも青年大民団の目的は、社会の改善・変革にあり、当時の閉塞感を脱却するための活動でした。大民同人にとって国士館の教育が見据える先には、「大正維新」、すなわち社会の変革が根底にありました。日本の近代化という大変革を果たした明治維新を強く意識し、この維新の象徴としての「松陰」が、設立趣旨に掲げられたことがわかります。

## 2. 世田谷移転

次に、麻布区筈町に創立した国士館が、世田谷へ移転する過程から「松陰」との関わりを見ていきましょう。

受講生が増え、麻布区筈町の民家では手狭になった国士館は、創立の翌年、教育の基盤となる校地を求めます。大正7（1918）年8月、大民同人は『大民』誌上に「天下の友に（国士館新学園経営に就て）」のタイトルで事業拡張を発表し、同時に「国士館移設趣旨」を発して、吉祥寺に約3万坪の用地取得を宣言します<sup>6</sup>。また、その移転にかかる資金確保のために寄付金募集を開始し、頭山満・野田卯太郎・田尻稲次郎の連名で募金趣意書を作成して、援助を求めています。

吉祥寺移転の準備を整えるなか、大民同人は、国家に殉じた国士の慰霊を企画し、大正7年11月、世田谷の松陰神社において第1回の「国士祭」を開催します。これにあたって『大民』11月号には、花田大助の松陰の評論が掲載されています。このなかで花田は「吉田松陰は悟道の人なり」とし、また「実践し、躬行する所に哲人の哲人たる所以を見る」という表現で評しています<sup>7</sup>。この松陰神社での国士祭を契機に、国士館は吉祥寺の移転を取り止め、急遽、世田谷へ計画を変更することになるのですが、その経過を史料に見ておきましょう<sup>8</sup>。

### 偉人の霊我を導く

此日吉田松陰、橋本左内の二霊を追弔すべく武蔵野の原頭世田ヶ谷村の松陰神社境内に於て第一回の国士祭を行ふ、(略)

扱て此の松陰祭果て、休息せる折松陰神社の社司を勞し、種々閑談に及び其昔偉人松陰が「留め置かまし大和魂」と詠じた武蔵野の広々した秋の光景を眺めると、我等は低徊去る能はざるものあり、依て「此辺に適当な学校用地が無からうか」と問ふと社司の話には「神社と豪徳寺との間に幾千丁歩の畑

地あり、松陰の遺風を慕うて態々国士祭を行はるゝ方々が学校用地としては甚だ意義の在る事と思ふ」との話であつた。

「然り、偉人の霊、我を導く！」

我等は刹那電光の如きインスピレーションを感じ、深き確信を得た、依て猶予なく此の地所買入れの交渉を開始した（後略）

史料には、やや叙情的な表現も散見されますが、国士祭から約1年後の大正8年『大民』10月号に掲載された文章であり、むしろ大民同人が抱いていた松陰に対する敬意の念がよく表れています。また、国士館が世田谷に得た用地は、結果として約6,000坪でした。すでに着手していた吉祥寺の約3万坪への移転を取り止め、約5分の1に校地を縮小してでも松陰神社に隣接する世田谷の地に変更したことも、松陰への敬意の表れといえます。こうして大民同人は、松陰神社で催した国士祭を契機に、吉祥寺移転の計画を急遽変更し、国士館の教育に相応しい環境という理由から、世田谷の地に教育の基盤を移すことになります。なお吉祥寺の用地には、大正13年に成蹊学園が池袋より移転し、現在に至っています。

大正8年1月29日、大民同人は「世田谷建設相談会」を東京駅前の海上ビルで開催し、建設計画を具体化するとともに、この資金募集を開始します<sup>9</sup>。大正8年の『大民』4月号には「国士館新築趣旨」が掲載され、発起人として柴田徳次郎、小村欣一（外務官僚・小村寿太郎長男）、長瀬鳳輔（陸軍参謀本部編修官）、阿部秀助（慶應大学教授）、森俊蔵（陸軍大佐）が、世話人として頭山満・野田卯太郎（逓信大臣）・田尻稲次郎（東京市長）が名を連ね、以降の募金活動を本格化させます<sup>10</sup>。後に財団法人の監事を務める森俊蔵の日記から、同年5月と7月に森自身が福岡へ赴き、玄洋社の月成勲らに協力を求めて、麻生太吉等の福岡の鉾業家を訪ね、募金活動を行ったことがわかっています<sup>11</sup>。

こうして国士館は、大正8年11月9日に「落成式並に開館式」を盛大に催し、世田谷に教育の基盤を構えることになります。この時、建設した建物のひとつが、現存する大講堂です。同時に、修了年限3年の高等部を開設して、従来の夜間から昼間の講義となり、半期毎の学科課程を編成しています。なお、館長に柴田徳次郎、学長に長瀬鳳輔が就いています。また、運営の基盤を整えるため財団法人を設立します。大正8年10月6日、柴田徳次郎・小村欣一の連名で文部大臣へ申請し、11月7日付けで認可を得ています。

落成式における学長長瀬鳳輔の演説を次に見ておきます<sup>12</sup>。

#### 国士館の主旨及本領

（前略）その主旨は極めて簡単明瞭で、即ち国士たるべき人材を養成しやうと云ふのであります。又その本領に至りましては別に詳しく申上げる迄もな

く、第一此の講堂の建築が殿堂風でもあれば又寺院風でもありますが、要するに純日本式であります所を御注目下されば自然御合点が行くかと存じます。それに又校舎の位置をば、特に松陰神社の側に選みました点から致しましても、大概御諒解が出来られる事と信じますが、吾々は此の国士館をは、大正の松陰塾たらしめたいと云ふ理想を有して居るのであります。(略)

私は兎に角今日我が国に於きまして最も必要なのは、国家或は社会の為に自己の利益を犠牲に供しても意としないと云ふやうな真に愛国的精神に満ちて居る人格者でありまして、即ち吾々の所謂国士をば、政界は勿論、実業界にも、教育界にも、宗教界にも、或は又労働界にも沢山に欲しいのであります。(後略)

長瀬は、国士館の理念が「国士たるべき人材」の養成にあり、また国士館を「大正の松陰塾」としたいと述べています。さらに「国士」の意味に言及し、自己犠牲の精神を持った真の人格者であると説明しています。長瀬の演説は、国士館の教育理念と「松陰」との関連が端的に示されています。

この時期の国士館のひとつの特徴として、教職員が校内に居を構えたことが挙げられます。このために、全寮制であった学生は、教員と寝食を共にして、自給自足の共同生活を行っています。共同生活においては、自治「国士村」制度が設けられており、学生は日々の生活のなかから実践的に学ぶ、という手法が執られました<sup>13</sup>。

大正 10 年 7 月、国士館の支援組織として「国士館維持委員会」が発足します。会長に栗野慎一郎、委員に頭山満・野田卯太郎・金子堅太郎ほか各界の名士 14 名で構成され、後に大正 11 年に洪沢栄一、大正 13 年には徳富蘇峰らが委員に加わっています。その役割は、資金を広く募り、国士館の運営を支えることでした。

なお、徳富蘇峰が著した『吉田松陰』は、明治 26 年 12 月の初版発行以降、13 版を重ね、明治 41 年 10 月に改訂版を発行後は、大正 15 年までの間に 34 版を重ねた大ベストセラーとなっています。蘇峰は、同書で「第二の維新を要す」と記し、吉田松陰が広く知られるきっかけを作っています。草創期の国士館は、柴田徳次郎、花田大助、喜多(山田)悌一、上塚司を中心に運営されていました。彼らは、いずれも明治中期の生まれです。国士館の中心であった彼らが、同書に大きな影響を受けた可能性があることを付言しておきます。

その後の国士館の発展を簡単に触れておきます。大正 14 年 4 月に初めて法令に基づいた中学校を設置(校長長瀬鳳輔)し、大正 15 年 4 月には世田谷周辺の 6 町村との共同運営で商業学校を設置します。校長には彦根藩世田谷代官家の大場信續が就任しています。昭和 3 (1928) 年 2 月には、現中高校舎・グラウンドにあたる土地を毛利家から購入し、校地の拡張を図ります。次いで昭和 4 年 4 月、

剣道・柔道を専修とする専門学校を設置し、校長には前文部大臣の水野錬太郎を迎えて、着実な発展を遂げることになります。

### 3. 景松塾（模造松下村塾）建設

最後に、国土館において、吉田松陰への顕彰が、かたちとなった事象を紹介します。

昭和 13（1938）年 3 月、国土館中学校の校長事務取扱である尾高武治が発起人代表となって、山口県萩市の松下村塾の模造を作る計画が浮上し、「国土館景松塾建設趣意書」を発表します<sup>14</sup>。趣意書には、松陰の「教育に於ける根本精神を継承」するため、松下村塾を再現して校内に建設し、修養道場とすることが記されています。これ以前の昭和 3 年 11 月、松陰没後 50 周年を記念して世田谷松陰神社の大改築が行われた際に、国土館は旧本殿を譲り受け、「国土神社」と称して校内（現在の 6 号館周辺）に移築した経緯がありました。以来、国土神社前には、松陰をはじめとする「国土」を祀り、毎朝授業の開始前には神社前で朝礼を行っていました。



写真 昭和 14 年頃 右は国土神社、左は景松塾

景松塾の建築にあたっては、萩市在住で元山口県会議員の厚東常吉と、萩出身の画家松林桂月に支援を依頼し、松下村塾を精巧に模倣するための建設準備が進みます。昭和 13 年 11 月 18 日、萩から呼び寄せた大工や左官のほか、全ての建築資材が東京に到着し、翌 19 日には地鎮祭が行われて建設が開始され、12 月

7日に竣工しました。昭和14年1月14日には、景松塾の竣工報告式が大講堂で催された後、九段の軍人会館で松陰先生を偲ぶ会が開催され、萩や防府の名士・学校長が招待されています<sup>15</sup>。この様子は、萩でも驚きを持って伝えられ、建設の支援にあたった厚東でさえ「松陰先生熱が地元の萩より彼地方が盛んなのには驚いた」と述べています<sup>16</sup>。

景松塾が、細部に亘って松下村塾を模倣し建設された様子を、少々長文ですが「国士館松下村塾景松塾紀要」に見ておきます<sup>17</sup>。

(前略) 塾舎建築に当つては其の竣成の上は、百年以上の星霜を経たる古き松下村塾に彷彿たらしむることを眼目とした。此の目的で、建築諸材料は、悉く萩地方に於いて先生に由緒のあるものを苦心蒐集し、同地松下村塾附近に於いて、一々村塾の寸法に合せ乍ら之を切り、之を削つて、一度現地で組立て、識者の批評を経たる後、東京に輸送したのである。

使用の木材と屋根瓦は、元毛利藩の代官屋敷で、後、郡役所庁舎に用ひ、郡制廃止後山口県の管理に属し居たる建物を、縁故払下を受けて之を解体して得た古材木古瓦より取つたものである。処が偶然にも、此の代官屋敷の用材の約三分の一は、松陰先生の養母の生家なる森田豊吉氏所有の山林から伐採したもので、屋根瓦は、阿川と称する元毛利藩の御抱瓦職の焼いたもので、今でも各瓦の一端に角に阿の字の刻印を認むることが出来る。

土台下及塾舎周囲の土留の丸石は、松陰先生生家杉家の眼下を流る、水無川の月見河原から拾ひ集めたもので、其の数約四百個、壁下の木舞用及雨桶用の竹材も、壁の上塗用の土も、全部村塾に使用しあるものと同質のものを、萩から輸送して来たのである。殊に右の石は、村塾の夫れと大小恰好の等しきものを、一村塾の石に並べて敷いた上、之に順序番号を付して輸送し来り、其の据付現況に近似することに努めたのである。松陰先生の門人が、先生に対する幕府の処置を憤慨の余り、村塾十畳の間の柱に切りつけたといふ刀痕も、亦詳細に摸してある畳の敷方、障子襖の引手の形状、附工合を摸したることも勿論である。村塾の二階は所謂踏天井である。先生の時々冥想され、又休息された所と伝えられてゐるが、是れ亦原形の儘移築されてゐる。先生の使用された机も、似寄の木同一寸法で、萩で作つて塾に据ゑた。

景松塾標は萩の松陰神社社司市川一郎氏の手を煩はした。(後略)

木材と屋根瓦は、萩市江向にあった萩藩の当島宰判代官所として、明治3(1870)年の郡制施行後は阿武郡役所として使用されてきた建物の払い下げを受けて、これを解体し、松下村塾付近で一度試し組みを行ったうえで、国士館に移送しています。また、建物の土台や周囲に置いた土留の丸石は、松陰生家前の川原から集



めて、松下村塾の石の上に並べて番号を付け、同様の位置に置いています。加えて、松陰の門弟が切りつけたとされる柱の刀痕や、襖の引手の形状、松陰使用の机に至るまで、徹底して詳細に模倣したことが読み取れます。

国士館校内に建築した景松塾は、昭和16年11月に尾高が代表となって松陰神社へ奉納願を申し出て<sup>18</sup>、松陰神社の鳥居西側へ移築されています。その後、平成10(1998)年頃に松陰神社境内の再整備が開始され、鳥居脇から本殿北側へ建物を移動し、現在に至っています。先の「景松塾紀要」に見えたとおり、現在でも屋根瓦には「阿」の刻印を確認できます<sup>19</sup>。

## おわりに

ここまで、国士館の歴史の一端を紹介しながら、各史料に見える「松陰」を見てきました。

国士館の歴史をひもとけば、今回紹介した事象のほかにも、国士館と「松陰」の関連を示すものを見ることができます。例えば、昭和40年頃に学内で「松陰」顕彰のブームが起っています。「松陰」は館長訓話の題材となり、大学出版部では『訓話資料 吉田松陰』の小冊子が発行されて、全学生・生徒に配布されています。また、現在の国士館においても、「松陰」との関係を示すものは、身近に存在しています。国士館館歌の2番の歌詞は「松陰の祠に節を磨し」と歌いますし、校章の楓(もみじ)は大正8年11月4日の開館式の早朝、柴田徳次郎が松陰神社で詠んだ一首に由来する説があります<sup>20</sup>。

このように国士館の歴史には、創立の理念を代表する「松陰」が、また様々な「松陰」顕彰のかたちが、各時代の資料に表れていることがわかります。

## 注

- 1 「青年大民規約」(『大民』創刊号・大正5年6月、『国士館百年史 史料編』上4頁)
- 2 「宣言 活学を講ず」(『大民』2巻11号・大正6年11月、同前83頁)
- 3 「青年大民団正規」(『大民』第3巻4号・大正7年4月、同前40頁)
- 4 「国士館規則書」大正8年11月(同前173頁)
- 5 「国士館設立趣旨」大正8年11月(九州大学記録資料館蔵、同前85頁)
- 6 「国士館移設趣旨」大正7年夏(同前113頁)
- 7 「吉田松陰の為人に就いて」(『大民』3巻11号・大正7年11月、同前115頁)
- 8 「偉人の霊我を導く」『大民』5巻1号新築記念号・大正8年10月、同前117頁)
- 9 「麻生太吉宛柴田徳次郎書簡」大正8年1月27日(同前119頁)
- 10 「国士館新築趣旨」(『大民』4巻5号・大正8年5月1日、同前120頁)

- 11 森俊蔵文書『森俊蔵懷中日記』大正8年（同前 122 頁）
- 12 「国士館の主旨及本領」（『大民』5 卷 3 号・大正 8 年 12 月、同前 154 頁）
- 13 「学生等が造る理想の自治村」（『東京朝日新聞』朝刊・大正 10 年 4 月 17 日、同前 189 頁）
- 14 「国士館景松塾建設趣意書」昭和 13 年 3 月（同前 770 頁）
- 15 『長州新聞』昭和 14 年 1 月 15 日（同前 772 頁）
- 16 『長州新聞』昭和 13 年 12 月 13 日（同前 771 頁）
- 17 「国士館松下村塾景松塾紀要」昭和 14 年 1 月（同前 772 頁）
- 18 「模造松下村塾奉納願」昭和 16 年 11 月 1 日（同前 774 頁）
- 19 シンポジウム後、松陰神社では、明治維新 150 周年記念事業の一環で平成 27 年 2 月 10 日より制震補強や瓦の交換など大規模な修繕工事が開始され、平成 28 年 10 月 27 日に完工、修祓式が挙行された。
- 20 「未明松陰社前に額きて」（『大民』5 卷 3 号・大正 8 年 12 月 1 日、同前 157 頁）